

博士論文の要約

氏名：増田 齋

論文題目：遠藤周作と戦後経験——〈踏絵〉と〈転向〉をめぐる戦中派キリスト教作家の文学実践

本論文では、戦中派キリスト教作家である遠藤周作（1923～1996年）が思考する戦時の倫理的課題を捉え、遠藤の戦後経験を明らかにするために、〈踏絵〉と〈転向〉が交差する場所を検討する。

「はじめに」では、本論文の目的として、次の3つを挙げた。

1. 遠藤周作が戦中派キリスト教作家として自己形成する道程を明らかにする。
2. 遠藤周作の戦後キリスト教作家としての政治的实践を明らかにする。
3. 遠藤周作は戦後の文学実践のなかで戦時に直面した倫理的課題に取り組み、同時に戦後の同時代的課題に応答をしていたことを明らかにする。

これら3つの問いは、それぞれ「第Ⅰ部 キリスト教作家の遠藤周作」、「第Ⅱ部 遠藤周作と大阪万博——1970」、「第Ⅲ部 遠藤周作の小説と戦後経験——1960/1970」に対応する。作家研究と作品研究を往還して遠藤が思考する戦時の倫理的課題を捉え、更には刊行当時の社会的・政治的状况を整理して、戦後の同時代的課題にどのように応答をしたのか、その方法論を検討する。

序章「戦後経験という視座——〈踏絵〉と〈転向〉が交差する場所」では、キリスト教文学及び遠藤周作研究史を概観し、歴史的な脈を踏まえた解釈の提示が共通課題であることを示した上で、戦後日本のキリスト教史及び宗教史のなかに関連させる視点を提出した。本論文では、遠藤周作文学を「キリスト教文学」であり「戦争文学」であると解する視点を提示するために、遠藤の「戦後経験」を検討し、戦中派キリスト教作家の文学実践を検討する意義を示した。

第Ⅰ部第Ⅰ章「〈キリスト教作家〉としての自己形成——読者から批評家、そして小説家へ」では、遠藤周作がキリスト教作家となる過程を辿るために、信仰経験やキリスト教文学への姿勢を検討した。遠藤は、西欧のキリスト教を「合わない洋服」と表現するように、主体的な受洗ではなかったからこそ、キリスト教作家としての問題意識を培っていく。遠藤は、創作活動を通して、人間や社会を超越した形而上学的な「人間を超えた世界」を「創る」ことを使命とした。

第Ⅱ章「遠藤周作と宣教師たちの交友——戦時下弾圧、GHQ 占領期、第二バチカン公会議を背景に」では、遠藤周作がキリスト教作家として行った創作活動、文化活動に深く影響を与えた外国人宣教師として、アルフレッド・メルシエ、ペテル・J・ヘルツォーク、ジェームス・F・ハヤットを取り上げた。戦時下日本で外国人宣教師がスパイ容疑をかけられ弾圧・拷問を受けた事例や、GHQ 占領期に発行されたカトリック布教雑誌『カトリック・ダイジ

エスト』に遠藤が関与していたこと、そして第二バチカン公会議を背景にメディアを用いた宣教活動に、キリスト教作家として協力したことを示した。

第 II 部 第 3 章「キリスト教作家による宗教芸術の体現——大阪万博キリスト教館の形成過程」では、1970 年大阪万博に、大衆伝道とエキュメニカル運動の具現化のために「キリスト教館」が出展され、遠藤周作が関与していた事実を明らかにした。遠藤を中心としたプロデューサーたちは、広告代理店の助言を受けながら、キリスト教信仰を持たない者の記憶にも刻まれるような演出を画策し、「宗教芸術館」を形成した。また、カトリックとプロテスタントが共同で宗教行事を実施するなど、教派の垣根を越えて、大阪万博のなかで「調和」の精神を体現した。

第 4 章「戦後キリスト者の主体性論争——大阪万博キリスト教館界における対立」では、大阪万博キリスト教館出展を巡る反対運動を対象とし、キリスト教館という小さなパビリオンが、戦後日本社会を象徴する〈政治の季節〉を体現した場になっていたことを明らかにした。キリスト教館のプロデューサーである遠藤周作は、政治的なものを排除するような「芸術」を体現したと批判され、キリスト教作家としての政治的立場が問われた。本運動の分析を通して、戦後のキリスト教界に「主体性論争」が巻き起こっていた実相を示した。

第 III 部 第 5 章「〈踏絵〉と〈転向〉の交差——遠藤周作『沈黙』の道程」では、遠藤周作がキリシタン時代の「踏絵」を描く背景には、戦時下キリスト教徒として過ごした裏切りの経験や、またその経験を背負って戦後を生きる「転向」の問題があったこと示した。最初のキリシタン小説「最後の殉教者」(1959 年)、再転向とユダの許しが主題となった「その前日」(1963 年)、戦時下に受けた不条理な暴力の記憶を描いた「札の辻」(1963 年)、棄教／転向の経験を消費する世代を風刺的に捉えた「帰郷」(1964 年)の分析を通じ、『沈黙』(1966 年)を「キリスト教文学」と「転向文学」を架橋する作品と位置付けた。『沈黙』が多様な読者に支えられていたのは、遠藤周作が戦中派キリスト教作家として、戦時の倫理的課題と対峙し、過去—現在—未来を複合的に捉える歴史意識を体現する「戦後経験」を持っていたことを示した。

第 6 章「〈裏切った弟子〉としての私——遠藤周作『死海のほとり』における巡礼」では、『死海のほとり』(1973 年)は、遠藤周作自身を彷彿とさせる小説家「私」が、現代イエスラエルにてイエスの足跡を辿るなかで、戦時下の記憶を取り戻していく物語として読解した。「私」は、戦時下の経験によって教会から離れながらも、「裏切った弟子」に自己を投影しながら戦後社会を生きてきた。だが、戦時下に体験した裏切りの行為が、戦後を生きるなかでもいつまでも傷として残り、その克服のために〈教会のイエス〉ではなく〈私のイエス〉を探求する行為が必要であったと解釈し、それは遠藤自身にも共通する課題だったことを明らかにした。

第 7 章「〈無力なイエス〉が成し得たもの——遠藤周作『イエスの生涯』と同伴者」では、遠藤周作が評伝という形式を通して、どこに強調点をおいて聖書を読み、イエスを描こうとしたのか、聖書に対する基本的な理解を示した。特に、イエスを見棄て、裏切った弟子たちが、再び信仰を取り戻し、使徒へと変貌した理由に関心を寄せた点へ着目した。それは遠藤が「踏絵」を踏むような戦争体験を経て、それでもなおイエスに従う「弟子」として歩み続けた作家であったと解した。イエスは、自身を裏切った者たちのために十字架で死に、愛と救いを祈り、そして復活し、共に歩み続ける「同伴者」であり、そこに「踏絵」と「転

向」の相違点を見出した。

第8章「〈無力なイエス〉と戦後経験——遠藤周作のイエス像批判をめぐって」では、遠藤周作が描く無力なイエス像を、戦後キリスト教界の文脈で捉え直し、その意義について検討した。遠藤周作のイエス像への批判は、(1) 転向する弱者をイエスが批判しないこと、(2) イエスが無力であることに対して向けられたが、その背景には、聖書学の影響や、戦後日本社会のなかでキリスト教徒が模範とすべきイエス像の論争があった。信仰的にも政治的にも立場が求められる時代のなかで、〈無力なイエス〉を描くことは、戦中派の遠藤にとって「異議申し立て」であったことを示した。

終章「遠藤周作の宗教的経験としての戦後経験」では、戦中派キリスト教作家である遠藤周作の文学実践は何だったのかを改めて検討し、残された課題を挙げた。遠藤周作及び遠藤が描くイエスは、内面の問題に終始し、社会や政治、歴史を変革する思考がないと批判されてきた点を取り上げ、宗教的経験としての戦後経験を語る意義を示し、応答した。遠藤周作の文学実践は、暴力を前にした人間の「弱さ」の検討を通して、過去を振り返り、現在を捉え、未来を思考するような、複合的な歴史意識を喚起させ、戦争を捉え直す力を促すものと結論づけた。